

2021年度流通科学大学大学院博士論文審査報告書

2022年2月9日

指導教授(主査)

向山雅夫



1. 博士論文題目 「ネット小売における流通機能遂行様式の多様性 —リアル世界との比較視点から—」

2. 執筆者

学籍番号 85190039 氏名 周子善

3. 論文内容の要旨

我々が商品を購入する際には、これまでは「小売店舗に出向し、商品を手に取り、商品情報を店頭であるいは店員から取得し、価格を知り(場合によっては価格交渉を行い)、代金をその場で支払い、商品を手にして帰る」ことが一般的であった。一部カタログ販売やテレビショッピングなど、無店舗販売が存在してはいたが、基本的には商品は小売店舗で購入することになっていた。そして理論的には、これまで構築されてきた流通理論は、すべてこの現実を前提にして分析されてきたものであった。

しかしながら、いま現実が大きく変貌している。上記のような小売の世界を、「リアル小売」と呼ぶとすると、現代小売の主流は「ネット小売」の世界に移行しつつあるといえる。そこでは、リアル小売における商品購入に関わる行動は、すべて正反対である。すなわち、「小売店頭に出向することなく、商品を手にとらず、商品情報は予めインターネットなどで取得し、価格は既に店舗からショッピング・サイトに提示されており、代金支払い手段は多様であり、商品は後日配送されてくる」のである。

こうしたネット小売の世界が急速に拡大していることは、誰もが実感できる周知の事実である。しかもこの傾向は世界共通である。リアル小売が発達している先進諸国だけではなく、リアル小

売が未成熟な途上国にも、この動きは顕著である。むしろ、後者において急成長している感がある。

このような事態は、従来の流通理論がその理論構築の前提としてきた現実世界が一変したことを意味するが、この現実の変化に流通理論はどのように対応してきたのか。残念なことに、ネット小売を対象にした研究が存在しないわけではないが、しかしそれらのほとんどは、ネット小売の実態を紹介したり、日々進化するネット小売世界の新現象をレポートする程度であり、ネット小売の世界を前提として、それを理論的に分析しようとした試みは、ごくわずかしかな存在しない。

本論文は、ネット小売の世界を説明する全く新たな流通理論を構築するための最初の第一歩として、既存の流通理論に基づいてネット小売の世界を分析することによって、既存流通理論がネット小売の世界をどこまで説明できるかを検証しようとしている。そのために設定された具体的な研究目的は、①ネット小売業者が所有権移転機能、情報伝達機能、物流機能という3つの流通機能を遂行する様式は、リアル小売業者のそれと同じか、異なるのか。異なる場合、ネット小売業者はどのような流通活動をどのように履行するのか、②ネット小売業者の類型は多様であるが、全てのタイプのネット小売業者の遂行する流通機能は同じ様式であるのか、異なるのか。異なる場合、各ネット小売業者はどのように流通機能を遂行しているのか、を明らかにすることである。

この研究目的を解明するために、本論文は以下のように構成されている。

第1章では、ネット小売の類型を検討して、研究対象を明確にした。ネット小売は企業の有無、運営主体、小売店店舗の有無、品揃えの形成様式、ウェブサイトの運営方式などの次元によって、21種類に細分化することができることが明らかになったが、それらを整理したうえで、マーチャント型、マーケットプレイス型、出店型という3つのネット小売業者類型を抽出した。

第2章では、ネット小売における流通機能の遂行に対する研究は不十分であるとの認識から従来の流通機能研究と小売機能研究をレビューすることによって、研究視角を明確にした。リアル小売業者は小売店舗の存在を前提としてその流通産出が検討されており、この流通産出を生み出すために流通諸活動が行われている。これに対して、店舗を前提としないネット小売における流通産出とは何か、それはどのような流通諸活動によって実現されているのかを検討した。

第3章では、従来のリアル小売を対象とした流通理論の中核を形成する品揃え形成研究をレビューすることを通して、小売店舗を運営していないネット小売業者にとっての品揃えとは何か、ネット小売業者はどのような品揃えをどのようにして形成するのかを明らかにした。

第4章では、既存研究のレビューを踏まえて、本論文の分析枠組みと研究方法を明らかにした。そこでは、ネット小売業者の流通産出が品揃え、信頼関係、ウェブサイトの利便性、物流水準、アフターサービスから構成されるとして、品揃え形成、信頼構築、ウェブサイト運営、ビッグデータの収集・処理、個客対応、注文処理、配送という7つの流通活動次元からネット小売業者の小売機能構造モデルを提示した。

第5章・第6章・第7章では、先進事例として中国のネット小売業者3社(京東・アリババ・加速時代)を取り上げて事例分析によって、3社の流通機能遂行様式の特徴を明らかにした。

第8章では、リアル小売機能構造とネット小売機能構造を比較して、両者が遂行する流通活動様式の異質性について検討し、さらにネット小売の3つの類型間比較によってネット小売業者の流通機能遂行様式の多様性を明確にした。

結章では、本論文の成果が整理され、研究の限界や今後の課題がまとめられている。

4. 論文審査結果の要旨

本論文は、世界で急速に成長を続けているネット小売を取り上げ、既存流通理論の核心概念ともいえる流通機能の観点から、ネット小売における流通機能遂行様式を比較事例分析によって明らかにしようとした研究である。ネット小売の世界は、成長を続けているだけではなく、同時にその変化速度が極めて早い。この現実に対して既存研究では、リアル小売との単純比較によるネット小売特性の検討、ネット小売利用者の特性分析、ネット小売ビジネス成功のための戦略分析などが一部存在するものの、それらはほとんどマネジリアルな視点に立つ研究である。そこでは、そもそもネット小売とは何か、リアル小売と比較してその本質的特性は何か、リアル小売を前提とした流通理論はネット小売を十分に分析することができるのかなど、ネット小売に対する理論的アプローチを志向する本格的な研究は、未だ行われていない。

ネット小売研究の現状をこのように認識した上で、本論はネット小売理論の構築を目指す初の取り組みである。新しい現象を説明しようとするときには新しい理論が必要となるが、しかし新理論は一夜にして構築できるものではない。従来の流通研究が店舗を前提とした小売を前提としてとらえている限り、店舗を前提としない小売はその射程外である。それゆえに新理論が求められるのであるが、その新理論構築に向かって本論文は、既存流通理論はどこまでネット小売を説明できるのかを確認することから始めようとしている。既存流通理論をネット小売分析のために修正・補強することで、何が見えてくるのか、何をどこまで明らかにできるのかを確認しようとしたのが本論文である。将来の新たな独自理論構築を目指すための手法として、手堅くかつ確実

な成果が期待できるアプローチであると言える。

そこで本論文が注目した既存の理論概念は、流通機能とその遂行様式、および流通産出である。リアル小売を前提としたこれら概念をネット小売に適用するためには、これらの概念に一定の修正を加えることが必要となることを明らかにした上で、分析のためにネット小売機能構造モデルを提示し(研究目的1の解明)、これに基づいて事例研究を行っている。ネット小売とリアル小売の特性を前提にして提示されたこのモデルは、修正ネット流通理論と呼べるものであり、ネット小売の理論研究として極めて価値のあるモデルであるといえる。さらにこのモデルに基づいて事例研究を行った結果、ネット小売業者類型間で、流通機能遂行様式が異なっていることを発見した(研究目的2の解明)。ネット小売の世界には多様性が存在するという指摘は、ネット小売分析の複雑性を意味しており、ネット小売理論構築のためには新概念開発が必要性であることを示唆しており、本論文のアプローチが次のステップに向けて有効であったことが明らかである。

以上のように、本論文はネット小売理論構築という未だ誰も試みたことがない壮大な目標に向けての端緒的研究として、膨大な既存研究の包括的なレビューを行い、それに基づいて独自の理論モデルを提示し、比較事例研究によって、ネット小売の世界を理論的に分析した野心的研究であり、その成果も独自性の高いものとなっている。加えて、研究目的解明に向けての論文構成及びその展開は極めて論理的であり、論文として高い完成度を持っていると評価できる。

しかしながら、本論文がいくつかの問題を抱えていることも指摘しておかなければならない。

(1) 包括的かつ入念な文献レビューではあるが、いささか冗長な記述がみられる。研究目的達成に必要な限りでのいっそう批判的な文献レビューであれば、レビューの位置づけが論理展開上より明確になったと思われる。

(2) 先進事例研究として中国のネット小売業者3社が選択されているが、各業者が実際にどのように7つの流通活動を遂行しているのかについて、詳細に踏み込んだ調査ができていない。データ源へのアクセスビリティに関する限界をいかに乗り越えるかが、今後の調査上の課題と言えるだろう。

(3) リアル小売の発展状況が未成熟な中国におけるネット小売業者を対象にした事例研究から見出された知見が、はたして流通先進諸国においても妥当するものかどうかの確認が必要であり、それなくして本論の議論の一般妥当性を検証することはできない。

(4) 一連の既存研究の蓄積における本論文の位置づけが曖昧である。

本論文には、このようないくつかの問題点が残されているとはいうものの、既に明らかになったように、既存流通理論の中核概念を用いて、理論的分析がほとんど進んでいないネット小売研究に切り込み、ネット小売理論構築に向けての初の第一歩を刻んだ点は高く評価するに値すると判断されると同時に、独自の新理論構築への課題も明らかとなっており、今後の研究発展が大いに期待される場所である。よって、ここに博士の学位を認定するものである。